

HCC Best Practice



東京大学医学部附属病院肝胆膵外科・人工臓器移植外科における肝細胞癌治療の取り組み 緻密な術前計画と新しい技術・治療法の開発、 複数のモダリティを組み合わせ 死亡率ゼロ・再発率の低下をめざす



Interview

長谷川 潔 先生

東京大学医学部附属病院肝胆膵外科・人工臓器移植外科教授

東京大学医学部附属病院肝胆膵外科は、その前身である帝国大学医科大学附属医院第二外科の開講(1893年)から2019年で126周年と、長い歴史をもつ教室である。診療内容が専門化・高度化するなかで診療科の再編成が行われ、現在「肝胆膵外科・人工臓器移植外科」として肝胆膵領域のさまざまな疾患を担当している。

肝胆膵外科では、主に肝癌や膵癌などの悪性腫瘍の治療に取り組み、肝切除術においては難易度の高い進行例でも根治が望める場合は積極的に手術を行う。肝切除術後の死亡率は全国平均に比べても低く、その背景には緻密な術前計画と新しい技術・治療法を取り入れる意欲的な姿勢がある。また、肝細胞癌に対する肝移植の実施件数は関東圏では最も多い。今回は、このような領域に先駆的に取り組まれている長谷川潔先生に、肝細胞癌治療の実際と今後の展望を伺った。

東京大学医学部附属病院肝胆膵外科・ 人工臓器移植外科の概要

東京大学医学部附属病院肝胆膵外科の前身である第二外科は、同病院の3つの外科の一つであり、長谷川先生が入局した1993年には、乳腺や上部・下部消化管の診療も行っていた。その後、専門化が進み、第二外科は肝胆膵領域と人工臓器移植を担う診療科に再編成された。肝

胆膵外科では、肝臓、胆嚢・胆管、膵臓の悪性腫瘍の外科治療に力を入れ、人工臓器移植外科では主に肝移植を行っている。

肝胆膵外科における肝切除は年間およそ200件。近年はC型肝炎を由来とする肝細胞癌が減少していることから、肝細胞癌に対する肝切除は減り、転移性肝癌、特に大腸癌肝転移例に対する手術が増えているという。B型肝炎由来HCCは横ばいなので。